10
winter 2005

CBRC Newsletter

The Road to Gaeta

分子設計チーム 研究員
富井 健太郎

その道は、もしかしたら、私の学生時代から続いていたのかもしれません。はじめて研究の対象としてタンパク質にふれた時から、立体構造予測が出来れば良いなという思いは、ずっとどこかにありました。

誰でもみんなが知っているという訳ではありませんが、この世では、2年に1度CASPという、タンパク質立体構造の非常に大規模な予測実験（オリンピックだと表現する人もいます）が開催されています。その歴史は、1994年から始まっています。過去には、2年に1度では物足りない、待ちきれないというような相当熱心な参加者（マニア）すら輩出しているとのことです。それだけ人を虜にする何かが秘められているのかも知れません。かくいう、われらがセンター代表者たる某氏も、第2回目から皆勤賞である相当熱心な方の一人です。

タイトルにあるGaetaは、イタリアのローマとナポリの間にある地中海に面した古い小さな町の名前です。私たちが訪れた冬は静かな港町なのですが、夏には休暇を楽しむ人たちでたいそうなにぎわいだと聞きました。私にとって今回が2回目の参加となるCASPの結果発表会が、2004年12月に、その町にあるホテルSerapoで行われました。

CASPの実際の予測実験は、梅雨さなかの6月に始まり、酷暑、そして休暇シーズンを終えようとする9月初めまで続きました。実際の予測が始まるまでに行ったさまざまな対策は、全てが実を結んだ訳ではありませんでした。ふり返ってみれば、平坦な道のりではなかったことに驚きます。これは、私のこれまでの研究者人生についても言えることです。しかし今回は、大変良い仲間に恵まれ、多大な協力を得てGaetaに招待講演の旅に出ることができました（詳細は、2ページをご覧下さい）。関係者への感謝の念にたえません。

今回ほど、打つ手だけでなく（意識的にせよ、無意識にせよ）打たない手までもが全て、調和のとれた帰結を迎えたことは、少なくとも思い出せる記憶の範囲にはありません。もしかしたら、2004年少し早めのクリスマスプレゼントを頂けたのかもしれません。この経験を糧に、まだまだ続く研究の遠い道のりを歩いていきたいものです。